

## 及川平治

### 久保いと



#### はじめに

私が及川平治（一八七五年～一九三九年）の幼稚園保育に接したのは、いまから十年あまり前のことになります。

文部省が、『幼稚園教育九十年史』の編纂にあたりまして、全国の幼稚園から、古い資料をあつめられたことがありました。

私は、当時執筆委員として、幸運にも全国からあつまった資料を、直接手にとって拝見する機会をえました。

それらの資料は、園児の作品や、和紙に毛筆で「平民」

などとかかれた在籍簿や、園規、日誌などで、ひとつひとつ貴重なものでしたが、なかでも一瞬胸をうつような衝撃をうけた一連の資料がありました。

それは、明治末期としては非常に新しい理論にもとづいた園規と、カリキュラム構成の手つづきをふんだ生活単元のカリキュラムでした。その特色をあげますと、

(1)それまでの日本の教育学においても、また、幼児保育の分野にもみられなかった異色の教育理論構成を基礎として、

(2)その立場から、幼稚園保育を、人間の成長発達の基底として位置づけており、

(3)その位置づけのもとに、カリキュラムと方法を工夫し、

(4)カリキュラム構成については、当時の欧米における教育学と実践の成果を駆使した世界的水準にあり、

(5)しかも、実践記録には、子どもの自由活発な活動と、教師のおおらかなヒューマニズムがあふれている、といった魅力ある資料だったからです。

明治の末から、大正・昭和初期にかけて、このような理論構築と、それにうらづけられた実践をしていた幼稚園があった、ということに、私はつよい感動を覚えました。

それが、明石女子師範学校附属幼稚園であり、及川平治主事による保育の記録だったのです。

この時いろいろ、私は、及川平治氏の幼稚園保育をほりおこし、その実態を知り、その意味を考え、幼児保育史のうえにその業績を位置づけることに関心が集中しました。

しかし、いざはじめてみますと、わずか五、六十年まえのことでありながら、明石の実践をものがたる資料は意外に少なく、当時のカリキュラムをはじめ、個々の授業や、保育の実践記録や、日誌などの、いわゆる先生たちの自筆でかかれた第一次資料が残されていないために、その全貌

を把握しきれないうらみがありました。日々の実践記録を散逸させずに保存しておくことが、とりもなおさず、自ら歴史をきずくことになるのだということを、身をもって知った次第です。

### 明石附小の及川

さて、及川平治という人物は、小学校教育においては大有名な人で、すでに、歴史にその名を刻まれた人であります。明治の末から、明石女子師範附属小学校主事として、本格的な新教育を実践した日本で最初の現場人であり、同時に、ひろく世界の新教育運動を研究し、明石の教育に生かした研究者でもありました。

その新教育は、「為サシムル主義ノ教育」とよばれ、子ども自身を、学習を必要とする状況において、自ら学習意欲をもち、自学補導する教育でした。それは、旧来の伝統的な教育——すなわち、ただ教師の教えることを受けいれ暗記するような、無気力で学習動機をもたない教育——への批判から生まれたものであります。

それは、子ども自身を、学習をのぞむ主体、発達をのぞ

む主体としてとらえかえし、子どもの成長発達への志向性を、子ども自身の生活をとりまく諸問題を解決することを通して実現させていこうとする教育でありました。したがって、発達可能態としての子どもへの、あたたかいはげましの視線でもって、子ども自身と生活の現実をよく観ること、そして、生活と学習の統一をめざし、三十年間にわたる明石附属での努力がつづけられていきました。

及川平治という人は、宮城師範出身の現場人でありましたけれども、非常に研究心の旺盛な方で、ひろく世界の思潮と教育を研究し、明石における理論の構築と実践に生かした方でした。附属の先生たちの研究会には、いつも原書をよみながら話されたということです。及川氏の蔵書には、一九一〇—三〇年代に出版されたアメリカの新教育と児童研究の書物の主なものが網羅されており、子どもへのヒューマニズムに支えられた教育者の熱烈な生涯を記念して、胸像に刻まれていることば、

新教育ノ幕ヲ開カン

凡テノ子供等ノ為ニ

私ノ凡テヲ捨テム

ということばそのままの生涯でありました。

## 幼稚園における保育

次に、幼稚園保育においてはどうかと申しますと、教育の原理においては、当然、小学校と同じく「なすこと」によって学ぶ、「為サシムル主義」の保育でした。それは、基本的には経験主義の教育原理にたっています。明治四十年から昭和十一年の退職まで、その教育理論とカリキュラムは、生活と学習の統合をめざしながらしだいに発展していますので、年次をおって、およそ、三期にわけてお話ししたいと思います。

### 第一期 明治のおわりから大正初期にかけて

まず、及川平治の幼稚園保育は、当時の幼稚園におけるフレーベル主義保育にたいする批判からはじまっています。『保育方針並に幼稚園内規』という資料によれば、幼児保育のねらいとして、子どもの発達の自然の順序にしたがって、身体活動が重んぜられています。この時期に過度に精神を刺激することは、将来の完全な発達を妨げるし、

身体にも精神にも不幸をまねき、不具の人にしてしまおうので、幼児期にはかならず身体の保育を主眼とすること、と書かれています。この方針のもとに、明石の保育は、戸外でのあそびを多くとりいれ、旅行・園芸・体格検査（健康診断）をして、健康第一に保育します。

第一期における幼稚園の生活内容は、

保育事項——会集・園芸・旅行・遊嬉・談話・手技・

唱歌・観察・整理

生活ニヨル保育——服装・食事

の二つにわけられていました。

保育事項は、小学校令の遊嬉・唱歌・談話・手技の四項目に、会集・園芸・旅行・観察・整理があたりしく加えられて、九項目になっています。『保育日誌』（明治四十二年）によりますと、毎日の保育はのびのびと子ども本位にすめられています。会集では、及川主事や保母が子どもたちと朝のあいさつをかわし、戸外保育や、小旅行・見学などをさかんにおこなって、社会や自然のさまざまな事柄を、実地観察のかたちで学習しています。幼稚園令で登場する以前に、もう、観察は、「為サシムル主義」の保育においては、中心的な生活になっていました。

この時期の手技は、理論的には、幼稚園における恩物重視の慣例に批判を加え、すでに恩物保育から脱却していますが、「手技」という保育事項はまだ残されていて、豆・粘土・紙細工などにたよりながら、一方で、どうすれば子どもの自発性や創意を生かし、実生活と関連づけて、感動をともなった作成活動ができるかに、苦心がはらわれています。

なお、整理という保育事項は、毎日の園生活のおわりに、清掃や、整理整頓をすることをいいます。

「生活ニヨル保育」としては、服装・食事があげられていますが、この時期には、保育事項との関係も並列されています、生活と学習の統合には道遠しという状態です。

しかし、すでに明治末期に、谷本富の『新教育』の精神をうけついで、子どもの自発的学習をすすめる保育への第一歩をふみはじめ、戸外保育や実地見学・観察を保育の中心にすえたこと、生活教育をはじめたこと、などは、保育史上、注目すべきことと思います。

第二期 大正中期から昭和にかけて

大正期にはいつてとくにめだつことは、科学的手順をへて、カリキュラム構成をする努力をしていることです。これにはまず、子ども自身への観察調査をいろいろと試みています。子どもの個性の観察や、習慣態度・知的能力・身体諸能力の測定と、子どもをとりまく家庭や郷土の問題ととりくんで、これらの両方のデータをふまえて、カリキュラムがたてられました。

この時期のおわりごろに、カリキュラムにおける発展がありました。ここでは、内容が、

(1) 保育項目ニ分離セザル生活單位案

(2) 保育項目別單位案

の二つに分けられたことです。

第一期では、九項目の保育事項がまだ前面に出ていて、

保育事項のなかでの新しい試み——たとえば、旅行・園芸・戸外保育・観察が中心になって、これに生活教育が加えられていました。

しかし、第二期では、「保育項目に分離しない総合的生活経験としての生活單位案」が幼稚園の主流として前面に出てきて、保育項目別の保育が後退しています。

生活單位の例としては、買物ごっこ、自動車あそび、ゆ

うびんごっこ、家づくり、農夫あそび、水あそび、などの多彩な活動が実践されています。

このように、子どもの生活上の必要興味を基底にしながら、学習との統一にむかつて、生活教育の理論と実践が、一そうととのえられ、園芸保育や、近郊利用の保育が生活單位として実践されるようになりました。

第三期 昭和初期

以上のような二つの内容は、さらに、プロセクト法を採用することによって、まったく別の編成原理で包括され、統合されるようになりました。

『教育並保育概覽』という資料によれば、

「プロセクト法ヲ採用ス

保育科目ハ生活單位ナレドモ次ノ二大中心科ヲ設ク

(一) 自然科——自然研究ヲ中心トシテ、園芸観察ヲ行ヒ、

之ニ話シ方、描キ方、書方及手技製作ヲ結合ス

(二) 人文科——劇又ハ戸外ページェントヲ中心トシテ、之

ニ会話、唱歌、作法、製作、描キ方及律動遊戯ヲ結合

ス」

とあり、

「一日のプログラム

(一)見聞事項ノ報告、之ニ基ク訓話

(二)自然科、人文科

(三)食事作法

(四)整理(朝礼及終礼)

保育ニハ将ニ戸外指導ヲ重視ス」

とかかれています。

ここでは、領域別の保育事項が、自然科・人文科の総合的生活活動のなかに吸収され、それとの関連で指導され、内部的な構造性をもつようになりました。こうして、生活と学習の統一という課題は、自然科・人文科の大作業単元を設定し、これを中核として諸活動の内的関連をあきらかにすることによって果たされました。

このような生活単位による幼稚園の保育カリキュラムは、当時としては画期的なものでした。

こうして、明石附属小学校と幼稚園は、生活単位案の実践校として、分団式的教育法らしい、ふたたび著名になり、「新カリキュラムの精神にもとづく生活単位案、全国研究会」を年度ごとに数回開催し、全国から現場教師を集

めて研修を重ねました。

### 業績、その意義

及川平治は、附属の教師たちへの研修会はもとより、全国から集まった教師たちへの講義や研修に応じ、また、各地からの講演の依頼にこたえて出張し、実に多忙で幅ひろい活躍をつづけました。記念の胸像にぎざまれていることばそのままに、すべての子どもたちの指導に、すべての力を投入した情熱的な現場教師であり、また、ひろく海外の思潮や教育を学びつつ現場に生かした研究者でもありました。その合理性と科学性に支えられた生活教育論と実践が、ともすればおちいりがちなひからびた科学主義に墮さず、また、安易な学力低下をもたらすことがなかったのは、及川平治の、ひとりのこらすすべての子どもたちを教育しようとする平等な人間観と、子どもをかぎらない発達可能態とみる児童観と、それらの底に流れる強烈なヒューマニズムのためであった、と考えられます。

若かった頃、教師としてつとめた東北の大目という分校での、赤貧洗うような貧しい子どもたちとすごした体験

が、及川平治の教育者としての出発点になっていました。

貧しく、文化的にも医療的にもおくれた複式学級の教師として、及川平治は、

• どうすれば、この子たちを自ら学習を意欲する主体に変えることができるか、

• どうすれば、自ら学習してゆける研究法を身につけて自立することができるか、

• そして、現に、学習のおかれている子を、どうすればたかめることができるか、

という教育上重要な疑問に直面しました。大目分校の子どもたちは、これらの大切な問題を提起し、そして及川平治

は、その課題の解決に一生を捧げたように考えられます。

一言でいえば、レアリズムと、ロマンチックなまでのヒューマニズムが、この人の生涯を貫いていたということができます。

きのうの公開座談会（一九七六年五月日本保育学会「日本の新保育運動——一九三〇年代の実践を中心に——」）

のおわりに、宍戸健夫氏は、一九三〇年代が保育実践の黄金時代であり、大きくわけて、

(1) 明治からの教科主義を克服する自由主義保育理論の結

実として、倉橋惣三の誘導保育論

(2) 託児所を中心としてすすめられた生活訓練論

(3) 課業活動を系統的に位置づけようとした山下徳治の課程保育重視論

の三つの流れがあった、とまとめられました。

これとの対比で考えますと、及川平治は、

(1) 総合的活動を中核としつつ、

(2) 課程保育を綜合活動に位置づけて、

学習する方式をとります。しかし、これは課程保育を軽

視したことなく、基礎学力をもっとも重視しますか

ら、いわゆる這いまわる経験主義になりません。

(3) 生活訓練——生活指導——教育の概念の統一をはか

り、学習の基礎を生活にもとめ、重視した、

という諸点で、前述した三つの流れとは別の、むしろそれ

らを止揚した特色をそなえています。したがって、あきらかに、第四の立場にあると申せましょう。

及川平治の明石における理論と実践は、保育史のうえに

大きい業績をのこしたものとして、ぜひとも高く評価され

るべきものであると考えます。

(和光大学)